

# 室岡宮農組合



## 米倉 初夫組合長

室岡宮農組の3代目組合長。岩手中央農業協同組合の理事を務めながら、平成28年5月に同組合の組合長に就任した。

村松潔副組合長、村松宏二事務局長の3人で協力して法人の経営をしている。

団体名	農事組合法人 室岡宮農組合
代表者	米倉 初夫 組合長 ※平成30年3月30日時点
設立年月日	平成17年1月8日
組合員数	72戸
主要作目	水稻育苗、水稻、大豆、小麦、ミニトマト、みそ

高齢化が進み、農地を維持していくことが難しくなる時代に備え、歴代の積み重ねと新しいことに挑戦している室岡宮農組合を取材しました。

### 農事組合法人室岡宮農組合

農事組合法人室岡宮農組合は、機械更新費用や作業員確保、後継者の育成といった農業を取り巻く環境変化に対応するため、平成17年に「集落宮農組織」から法人化しました。

「組合の運営に苦労しているが、歴代の理事たちがしっかりとした地盤を築いたから今がある」と法人化当時は組合員だった米倉組合長は話します。

農業は草刈りや水管理、作業工程表を作るなど人手が必要で、農作物の収穫量を上げるには最適な時期に種をまき、収穫することが重要で、法人化当初はこの点に苦労したそうです。

### ところてん方式で円滑経営

室岡宮農組合では、人手不足解消と経営を継承させるため「ところてん方式」という方法

を実践しています。

これは、サラリーマンのいる組合員の家族を定年前から草刈りや水管理を任せ、定年退職後に組合の作業員として参画させる狙いがあります。また、現職で培った経営・マネジメントスキルは組合運営に活かし、農業のことは先輩オペレーターから技術や知識を学び、お互いの良さを生かして円滑な経営・技術継承に取り組んでいます。

### 新技術に挑戦し二毛作実現

寒冷地では同じ土地で1年間に2種類の異なる作物を栽培する二毛作は難しいとされてきました。

平成25年春ごろ独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センターと共同で「麦と大豆の立毛間播種」という新技術の実証試験に取り組みました。

麦と大豆の立毛間播種は、小麦の収穫前の畝と畝の間に大豆の種をまき、大豆の収穫前に小麦をまくことで、小麦収穫後の土地を有効活用する目的があり

ます。

実証試験の結果から栽培技術を向上させ、1つの土地では4年サイクルで小麦・大豆・水稻を栽培するローテーション（左ページを参照）が、土地への負担もなく、利用効率向上、収益性向上につながるという結論になりました。

### 6次産業に挑戦！みそづくり

栽培した大豆を活かすため、平成27年から6次産業化に挑戦し、みその生産・販売を8人で取り組んでいます。

原料の大豆は1、2等級の大粒を厳選し、麴は米粒が柔らかく麴にするのは難しいとされているササニシキをそれぞれ使用しています。「ササニシキの甘みが見所に生かされ、うま味の強いみそが仕上がる」と村松副組合長は話します。

みそは、学校給食や町内外の飲食店で提供されています。



仕込み途中のみそ



みそを作っている同組合の加工部会のメンバー

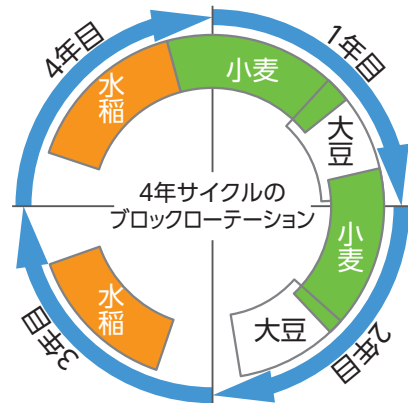


盛岡駅前にある飲食店では、同組合で作った大豆とみそを使っています。

このお店では、組合の大豆を使って自家製豆腐を作っています。自家製豆腐と県内の旬な食材を組み合わせ、お客様に提供しているそうで、取材した日は、ばっけみそ、みそ田楽、揚げ出し豆腐など計7品の料理を作っていました。



立毛間播種のローテーション



## 意欲的で創造力がある 集団組織として日本農業賞を受賞！

第47回日本農業賞の集団組織の部で優秀賞を受賞した農事組合法人室岡営農組合は、3月22日に盛岡市内で賞の伝達式に出席。この賞は、農業に意欲的に取り組み、活動に創造力があり他を啓発するにふさわしい集団組織に送られる賞です。都道府県審査を通過した全国94団体のうち、7団体が表彰され同組合はその一つに輝きました。

評価された点は、「農業における後継者不足の対策に取り組んでいる」「立毛間播種により小麦・大豆の収量を向上させた」「各種団体へ新品種・新技術の普及拡大に取り組んでいる」の3点です。

米倉組合長は「先代が築き上げてきた経営方針と我々の取り組みが評価されうれしい。より一層、地域と共に農業を発展させたい」と受賞の喜びとこれからの目標を話しました。

